

【目的】 日本の伝統芸能である「能」に用いられる「能装束」の中に、『丸紋尽くし』と称される一連の装束がある。種類としては縫箔に属し、様式化されながらも様々に多彩な文様の美を後世に伝える能装束の中にあつて、一つの類型を成している。その形象における便化・配色等の、構成上の手法や視点に内在される日本人の美意識は、日本の造形遺産としての家紋との密接な関係を考えると、深く民族的資質にかかわる歴史をもっている。本研究では、実物資料や写真資料をもとにそれらを現代の新しい視点で再評価・再認識していきたい。

【方法】 『丸紋尽くし』の背景について考察するとともに、ビジュアル・デザインという観点から、その形象の発想形式・色彩構成・文様構成についての分析を試みた。

【結果】 能装束には、その様式化が進行する過程において小袖文様と交錯するものも多いが、『丸紋尽くし』が小袖に見られないのは、様式化に伴って本来もっていた文様の意味が、別の要素（役柄の性格）によって変換投影されたと考えられる。また、その形式美を構成しているのは「丸」に象徴された形象の便化の卓抜さであり、しかも『丸紋尽くし』における手法は、あらゆる題材を丸で囲むことによって多元的視点による再構成を可能にし、一領の画面の統一を図ることができる。さらに散点的構図における幾種類かのパリエーションは、丸紋の大小によってその構成が決定づけられ、規則性を排して巧みに統一が図られている。色彩構成においても、配色の巧緻さは単調さを斥けている。これらは日本の美意識の表象の一端であるが、現代に息づく創造性の資質を裏付けるものと考えられる。